

医療系学部教育用語集 (Sept, 2020) Ver 1.3

岩手医科大学 医学教育学講座／全学教育推進機構
佐藤洋一、田島克巳、相澤純、伊藤智範、松村翼

Contents

[はじめに](#)

[アルファベット用語](#)

[カタカナ用語](#)

[日本語用語](#)

[高等教育行政の施策誘導に使われる用語](#)

[かつては常識的に使われた用語](#)

[ドイツ語由来の業界用語・方言](#)

【はじめに】

かつての象牙の塔で行われていた教育は、一部のエリートに施されていたもので高踏的であった。また、卒業時にライセンスが保証されていた医療系学部は不況に強い職種養成ということで人気が高く、学ぶ力に余力のある学生が比較的多く、教員(医師、歯科医師、薬剤師、研究者)は教育技法に無関心でも差し支えなかった。しかし、大学全入時代に入り、高等教育は普遍的なものとなり、大学は「教育力」を試されるようになっていく。医療系学部といえども、ライセンス取得者数を行政的に絞られてくる時代では、卒業時のアウトカム(学修成果)を見据えた体系的な教育を求められている。従って、医療系学部教員も、教育をまじめにしなければならなくなった。また、大学の組織そのものも、部門ごとの閉鎖空間を形作っていた。

ところが、医療系学部教育の現場では、ただでさえ専門外の人にはわかりにくい略語・業界用語が飛び交う上に、これまで親しんだことがない教育学用語や行政用語も次々に出てきている。表意文字の漢字で書かれていれば内容がそれとなく理解できるものの、意味不明のカタカナ用語も多く、しかも専門化すると必ず出現する略語は、他分野の人にとっては全くの呪文に過ぎない。研究あるいは診療しかしてこなかった若い教員には、医療系総合大学の教育ではわからない言葉が多すぎるのではなかろうか。学部特有の業界用語も実に多いので、多職種連携教育の際にはバベルの塔状態になる。事務職員も同様で、教務関係の部署に転属した職員は飛び交う用語に関して面食らうに違いない。更に大学教学組織の改革を求める文部科学省の施策誘導では、経営学的な発想に基づく様々な用語に頭を悩ませることになる。

本用語集は、岩手医科大学の若手教員と事務員に向けた解説集である。ただし、この種の用語の多くは、自然科学用語のような完璧な定義はなされていない。本来の字義から変容したものも少なくは無い。私たちがなにかみ砕いた内容になっているが、ともすれば独断と偏見に満ちた記述となっているので、注意された

い。また、用語は日々変わっているので、古い概念や死語が混じっているであろう。お気づきの方はご連絡を頂ければありがたい。(特に出典を明記したもの以外は、筆者等に文責がある)

【アルファベット (略語)】

AI artificial intelligence 人工知能

人工知能の医療への活用は、医療情報、画像診断、ゲノム医療、創薬、看護、介護領域など多岐に広がると期待されている。AI が人間の固有の能力を超えるとされる時点を、シンギュラリティ (特異点 singularity) と言う。

AO Admission office 入試担当オフィス

単なる入試業務だけでなく、学生選抜を戦略的にこなす事務部門。IR とともに文部科学省が設置を求めている。面接やインタビュー主体でおこなう入試を AO 入試と言う。→IR

AP Admission Policy 学生受け入れ方針

大学の特徴と指命に沿って、どのような学生を求めているかを明文化したもの。DP、CP と連動していることが求められる。良く勘違いされるが、入学にあたっての選抜試験の要項のことではない。→3つのポリシー、CP、DP

各大学・学部等が、その教育理念や特色等を踏まえ、どのような教育活動を行い、また、どのような能力や適性等を有する学生を求めているのかなどの考え方をまとめたものであり、入学者の選抜方法や入試問題の出題内容等にはこの方針が反映されている。また、この方針は受験者が自らにふさわしい大学を主体的に選択する際の参考ともなる。アメリカでは、高等学校の成績の点数、高等学校で履修しておくべき科目・内容、標準的な試験の点数等を具体的に示すことが一般的である。入学者受入れの方針に加えて、将来像答申が新たに提唱したのが、「教育の実施や卒業認定・学位授与に関する基本的な方針(ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー)」である。(文部科学省用語集より)

BLS Basic Life Support 一次救命処置

心停止や窒息という生命の危機的状況に陥った傷病者や、これらが切迫している傷病者を救命する第一段階の手段で、呼吸と循環をサポートする一連の処置からなる。胸骨圧迫と人工呼吸による CPR (CardioPulmonary Resuscitation 心肺蘇生) と AED (Automated External Defibrillator 自動体外式除細動器) が含まれる。誰もがすぐに行える処置であるが、心停止患者の社会復帰においては大きな役割を果たす。BLS のみでは心拍が再開しない傷病者に対して、薬剤や医療機器を用いて行うものを ALS (Advanced life support) と言う。(日本蘇生協議会)

BSL Bed Side Learning 病棟実習

字義通りであれば、病棟において医療チームの一員として参加する実習を指すが、広く臨床実習全般を指す言葉として使われることが多い。診察や実際の治療、カルテの書き方、コミュニケーションのとり方などを修得する。日本の医学部では以前はポリクリと称していた。薬学部でこれに相当するのが、実

務実習である。→クリニカル・クラークシップ、ポリクリ

CAP 制 cap キヤップ

頭にかぶせる帽子から転じて、数値的な上限を定めることを指す。大学教育においては、単位の過剰登録を防ぐための制度を言い、大学基準協会の基準では 50 単位が上限となっている。しかしながら、日本の医療系大学では、必修科目か選択必修科目で占められており自由選択科目は殆ど無いことから、CAP 制は事実上は無意味である。岩手医科大学では、文部科学省の補助金申請要件となっている CAP 制の導入に関しては、「実質的な CAP 制である」と記載している。

単位の過剰登録を防ぐため、1年間あるいは1学期間に履修登録できる単位の上限を設ける制度。我が国の大学制度は単位制度を基本としているが、大学設置基準上1単位は、教員が教室等で授業を行う時間に加え、学生が予習や復習など教室外において学修する時間の合計で、標準45時間の学修を要する教育内容をもって構成されている。また、これを基礎とし、授業期間は1学年間におよそ年30週、1学年間で約30単位を修得することが標準とされ、したがって大学の卒業要件は4年間にわたって124単位を修得することを基本として制度設計されている。しかしながら、学期末の試験結果のみで単位認定が行われるなどの理由から、学生が過剰な単位登録をして、3年で安易に124近くの単位を修得し、結果として45時間相当に満たない学修量で単位が認定されているという現象が生じたことから、平成11年に、大学設置基準第27条の2第1項として、「大学は、学生が各年次にわたって適切に授業科目を履修するため、卒業の要件として学生が修得すべき単位数について、学生が1年間又は1学期に履修科目として登録することができる単位数の上限を定めるよう努めなければならない」と規定された。(文部科学省用語集より)

^{カト}CATO Common Achievement Test Organization 医療系大学間共用試験実施評価機構

医学、歯学の共用試験(CBTとOSCE)を取り扱う公益法人。薬学の共用試験は薬学共用試験センターPhCATがおこなっている。→CBT, OSCE, PhCAT

CBE Computer-Based Education

コンピュータを利用した教育。

CBL Community Based Learning

地域基盤型学修。地域医療研修等は

これに属する、また、地域に根ざした課題を解決する Project Based Learning もこれに似ている。

CBT Computer Based Testing

コンピュータを利用して実施する試験方式のことで、受験者はコンピュータに表示された試験問題に対して、マウスやキーボードを用いて解答する。医療系学部の CBT は医療系大学間共用試験実施評価

機構 (CATO) が行っている。CBT では、プールした問題から適当な問題セットが受験者に表示されるが、個々の学生で問題は異なる。そのため、生点だけではなく、過去の正答率をもとにした難易度に応じて能力値 (IRT 値) も算出する。もともとは、CBT の結果を進級要件にするかどうかは各大学・学部任せられていたが、全国医学部長病院長会議 (AJMC) では、能力値 359 以上の学生に Student Doctor の称号を与えて臨床実習に臨むように強く推奨されている (全国医学部長病院長会議での基準; 平成 26 年)。プール問題は CATO が毎年各大学に作問を依頼し、随時、問題の入れ替えをおこなっている (入れ替え期間は CBT 受験不可)。CBT 受験にあたっては外部の試験監督者を入れ、ネットワークも遮断した LAN 環境でおこなわれる。また項目反応理論に従って、問題は非公開となっている。→CATO, IRT, OSCE

CP Curriculum Policy 教育課程方針

学位授与の方針に向かって、どのような教育内容にするか、明示したもの。単なるカリキュラム概要ではなく、DP を意識した筋道で書く必要がある。→3つのポリシー、CP、DP、カリキュラム・マップ

CPX Clinical Performance Examination 臨床パフォーマンス試験

もともと英国で導入された OSCE は、短い (数分-5 分) 技能評価の多数 (数 10) のステーションによる試験であり、臨床の実践力を長い時間で評価する試験は少し異なるということで、Clinical Performance examination (CPE, CPX) などというように呼ぶことがある。→OSCE, WBA, パフォーマンス評価

CST Cadaver Surgical Training, Cadaveric Simulation Training 解剖体による外科手技修練

御遺体を使った外科手技修練のことで、厳密に言えば日本においてはこれを取り扱う関連法規は未整備である。死体解剖保存法と献体法によると、医学歯学教育のための人体解剖が医学系教育機関のみで許されていることになっている。従って、人体解剖そのものは (本来は) 文部科学省の管轄であるが、厚生労働省は拠点大学にサージカルトレーニングセンターを設けて、外科手技修練をする機会を増やそうとしている。また、日本外科学会が主導して、現行法の枠組みの中で、大学に保管してある人体を使って外科手技修練するためのガイドラインを策定した (2012)。ガイドラインによると、CST は、各大学の倫理委員会で審査し、実施報告も義務づけられている。防腐・固定では、結合組織が固くならず関節も生体と同じような可動性を保つことからシミュレーションとして適しているとされている Thiel 法を用いる機関が多い。

ちなみに、最近では「献体を使った外科手技修練...」というような表現を見るが、「献体」というのは、自分の意志で死後に遺体を大学に預ける行為を指す (同様の例、献血) ので、御遺体を「献体」とするのは誤用である。

Diploma supplement

取得学位・資格の内容の等につき、標準化された表記 (全て英語) で卒業証書や成績証明書を補完する追加情報のこと。EU のように国をまたいで人の往来が自由になることで、就職或いは進学・転学の際に共通の様式で書かれた文書が求められたことから開発された (UNESCO はディプロマ・サプリメントの雛型を示している)。日本においては、単位の実質化と教育成果の可視化を意図して、文部科学省

が補助金要件として導入を図ろうとしている。しかしながら、日本の医療系学部はほぼ全科目必修で、到達目標もモデルコアカリキュラムに準拠しており、転学も実質的には無いことから、意味のあるものとは思えない。但し、海外での医療活動を望む卒業生は、これを求められることになるかもしれず、国際性をアピールする手段としてはこれを整備する意味があるかも知れない。

DWH Data ware house

データを集めているだけでは生きた情報源にならない、ということで情報工学者の William H. Inmon が提唱したデータベースの新たな概念。情勢変化に応じて、部門をまたいだ対応するために役立つデータベースとして、以下の特徴を上げた。1)主題(テーマ)ごとに生データを分解し、整理する、2) 機関の全ての情報を集めて統合する、3) 時系列的な変化を解析する、そのため 4) 古いデータを消さない、という特徴である。大学の IR に求められるのも同じであろう。また、病院の電子カルテ情報を DWH 化している医科大学もあり、卒前・卒後の教育と研究に意義があると思われる。→IR

ドープス

DOPS Direct Observation of Procedural Skills 臨床手技観察審査

WBA(Work-place Based Assessment)の一つで、英国で始まったテスト。実際の診療手技を学生が行うときに、指導医がチェックリストをもとに評価する。英国の GP (general practitioner) の審査項目には、必修として、ガウンテクニックや乳房診察、子宮頸部細胞診や性器の診察や直腸診などがあげられており、オプションとして滲出液吸引や搔爬、皮膚切開と縫合、関節腔穿刺などがリストアップされている。しかし、日本の学部教育においては、もっと初歩的な聴診や触診の手技を問うことになるだろう。→WBA

DP Diploma Policy 学位授与方針

大学が認定する学士としての要件を明示したもの。知識のみならず、態度、技能も含め、どんな能力(アウトカム)を修得したら学士として認定するかを定める。医療系学部では、しばしば学位授与の基準(例えば総合試験で何点以上、あるいは所定の単位を取得等)と混同している場合が多かった。グラデュエーション・ポリシー(GP: Graduation Policy)と表現している場合もある。→3つのポリシー、AP、DP

EBM evidence-based medicine 科学的根拠に基づく医療

注意深く、十分に実施された医療研究で得られた最善の根拠をもとに、医師の専門性と患者個々の状況と価値観を考え合わせ、より良い医療を目指そうとするもの。インターネットとデータベースの整備がすすみ、UpToDate®等のサービスを利用することで EBM に必要な情報は手に入るようになった。

ECFMG Educational Commission for Foreign Medical Graduates

アメリカ合衆国外で医師免許を得たものが、アメリカで臨床研修を行う資格を認定する機関。今までは ファイマー FAIMER(Foundation for Advancement of International Medical Education and Research)の International Medical Education Directory(IMED)に登録されている医学部を卒業していれば申請できた。→分野別認証評価、FAIMER

EMI Extended Matching Items 拡大多選択肢問題

あるテーマに沿って、選択肢を多くした客観試験問題の形式。CBT で多くなってきた選択肢が 20 個くらいある問が、このタイプ。比較的基礎的なものを問うもので、本当にできない学生を洗い出す(あるいはふるい落とす)のに適している。CBT の多肢選択2連問は、この形式であった(2016年から廃止)。ちなみに、音楽業界の老舗で CT の開発もおこなった Electric and Musical Industries(Ltd)も EMI と略されているが、エミと発音されることが多い。→MCQ

EPAs Entrustable professional activities 基本委任医行為

臨床研修医が、指導医の監視無しに単独でおこなうことのできる(すなわち、任せられる)基本業務のこと。2007年に ten Cate 等が提唱した用語で、臨床現場で医師を評価する(WBA; Workplace-based assessment)ときの対象となる行為の一つ。モデルコアカリキュラムにも加わり、卒前教育でもこれに沿った形で評価する傾向がある。コンピテンシーが、「測定可能である」とはいえ概念的でありマイルストーン(到達指標)を定めることが求められているのに対し、EPAs はより具体的でいくつかのマイルストーン群により形成されている。「これを君に任せるよ!」と明示して学修者に示すことは、「若者は任せられることで伸びる」という万古普遍の真理によるものである。コンピテンシーで定めたマイルストーンに「一人でもできること」という文言をつけ加えることで EPAs を導入できると思われる。

参考:Core Entrustable Professional Activities for Entering ... - AAMC.org →WBA、コンピテンシー、マイルストーン

FAIMER Foundation for Advancement of International Medical Education and Research

ECFMG や WFME の関連団体。世界の医育機関のデータベース(IMED; International Medical Education Directory)を構築している。北米で医業を営もうとする医師は ECFMG の試験をパスしなければならないが、FAIMER に認知されていない大学の出身者は受験資格が無い。本学も今のところリストに載っている(創立年 1928 年で外国人入学OK、とある)が、JACME による国際基準に則った認証評価を受けないと、このリストから外されることになる。→ECFMG、JACME、WFME

FD Faculty Development ファカルティ・ディベロプメント 教員能力向上研修

大学教員の教育力やマネジメント能力を開発する講演会やワークショップの総称。医学領域では年末に富士の裾野で行われる研修会(通称 富士研^{ふじけん})や岐阜大学医学教育開発研究センター(MEDC)でおこなわれているものがひな型となって全国の医療系大学に広がっている。実務実習指導薬剤師のワークショップ内容も、富士研的なものとなっている。事務職員を対象としたスキル向上プログラムを、SD (Staff Development)という。→SD

教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催等を挙げることができる。なお、大学設置基準等においては、こうした意味でのFDの実施を各大学に求めているが、単に授業内容・方法の改善のための研修に限らず、広く教育の改善、更には研究活動、社会貢

献、管理運営に関わる教員団の職能開発の活動全般を指すものとして FD の語を用いる場合もある。
(文部科学省用語集より)

GIO General Instructional Objectives 一般目標

コースを終えたときに期待される総括目標をあらわしたもので、学生目線で書かれる。具体的な行動目標 SBO とともにシラバスに記載する。概念的な動詞(理解する、修得する、身につける、会得する等)で記す。統括であるため、原則的に目標は1つに設定する。カリキュラム全体を見据えて、「○○のために、××する。」というスタイルで書く。長らく医学教育では GIO と SBOs で目標設定がなされてきたが、学士能力の保証を求められたことから、2000 年代後半からアウトカム基盤型学修(OBE)への移行が進められている。GIO を SBO に簡単に書きあらためるとしたら、「××をすることで、○○に到達する」というように倒置することで対処できる。OBE の方が、複数のコンピテンシー(プロとしてなすべき実践能力)を記載できるので、カリキュラム全体に占めるコースの意義がわかりやすくなる。→アウトカム、OBE

GMC General Medical Council 英国医事委員会／総合医療審議会

GP General practitioner 総合診療医

英国における総合診療医のこと。日本では未だに定義も曖昧であるが、英国では一つの専門職として確立している。技能の評価方法として ^{ドープス}DOPS を用いている。→DOPS

GPA Grade Point Average 学業平均値

各科目の成績を加重平均した数値で、学力を定量的に図る指標として欧米の大学で記されている。日本ではあまり馴染みがなかったが、文部科学省は大学のグローバル化を求めて、GPA 導入を政策誘導している。選択制で単位をとる学部においては平均化した成績を明示することは意味があるが、殆どの科目が必修科目になっている日本の医療系大学では、総合平均点と同じ意味しかない。とはいえ、政策誘導に則り、岩手医科大学でも GPA を導入して、成績不良者の退学勧告に使用することになった(2014 年から)。一般的には卒業時に全ての科目を網羅した GPA が使われるが、本学では学年制であることと、利用目的が退学勧告であるとの理由から、学年ごとの GPA を算出している。将来的には、就職時に全過程の GPA を求められるかもしれない。

^{ジーラット}gRAT Group Readiness Assurance Test グループ修得度テスト

TBL で行われるグループのテスト→TBL

ICT Information and Communication Technology 情報通信技術

e-learning やバーチャルスライドなど、ネットを利用したデジタル情報のやりとりをする際に頻用される言葉。以前は IT と言われていたが Internet Technology と混同するためか、C を入れて使われるようになった。

ID Instructional Design インストラクショナルデザイン、授業設計

教育工学の一分野で、授業を系統的に捉え、授業の効果、効率や魅力を高めるには何が必要かを議論する分野。効果とは到達度の向上、効率とは人的・物的資源に対しての費用対効果を高めることで、魅力とは学修意欲の向上を意味する。熊本大学大学院では、インストラクショナル・デザイナー(IDer)を養成する教授システム学のコースを設置している。→教育工学

IEPS Interdisciplinary Education Perception Scale

多職種連携教育 IPE/IPW における認識尺度表。2007 年に発表され、全世界的に使われるようになった。IPE の前後に行い、数値の変化を見る。

McFadyen AK1, Maclaren WM, Webster VS.; The Interdisciplinary Education Perception Scale (IEPS): an alternative remodelled sub-scale structure and its reliability. J Interprof Care. 2007 Aug;21(4):433-43.

→IPE, IPW, RIPLS

IPE Inter-Professional Education 専門職連携教育、多職種連携教育 (= multi-professional education, multi-professional learning)

他学部の学生と一緒に能動学修(実習屋セミナー)をおこなうこと。実社会では他分野の仲間と一緒に仕事をする IPW が多いことから、こうした授業を通じてプロフェッショナルとしての自覚を高めることが期待される。特に医療系学部ではこうした試みがもてはやされる傾向にあるが、教育効果が数字になって表しにくいことから、アンケート・テストによる定量化が試みられている。単なるイベントで終わってしまい、教員と学生の自己満足で終わってしまわないようにしなければならない。→IPW, IEPS, RIPLS,レディネス

IPW Inter-Professional Work 専門職連携業務、多職種連携業務

他職種と教導して行う業務。学部学生で行われる教育を IPE、卒後の現場で行う連携業務を IPW と言う。実際の医療業務は多かれ少なかれチーム医療であることから、ことさら連携を強調した IPW という言葉を使う必要はないかもしれないが、標語等で「やってる感」をアピールするときには便利な言葉である。→IPE

アイアール

IR Institutional Research

大学の情報を一括管理して解析する部門で、その解析情報は大学の運営方針決定に用いられるのが前提となっている。大学の教育・施設資産、知的資産や財務に関する財務IRと、学生情報に関する教学 IR を区別することもある。IR は戦略性を持って組織運営をするための情報を提供する課報部門のようなもの。集められた生の情報は秘匿されなければならないが、解析された情報(インテリジェンス)は、方針決定にあたっては、ある程度の範囲で広知させないと意味が無い。文部科学省は教育の質の向上に向けて、補助金支給要件に IR(この場合は教学 IR)を加えており、IR 設置を施策誘導している。文部科学省は大学を企業として捉えて運営するように行政指導を進めるとしたら、財務 IR の設置も求めることになるかもしれない。

岩手医科大学においては、教育情報に関する IR 機能を全学教育推進機構に持たせている。これまでは入試データと教務データあるいは学生健康管理データが別個に管理されていたが、IR では入学前～入試～各学年～卒業時更には卒後の学生データを集約して解析する。出てきた情報は学生支援に役立つものにして、関係各部署にフィードバックすることになる。財務 IR は設置されていない。→DWH

アイラット

iRAT Individual Readiness Assurance Test 個別修得度テスト

TBL で行われる個人のテスト。→TBL

IRT Item Response Theory 項目応答理論

共用試験で用いられている理論で、項目というのは各設問のことを指す。この理論から導き出される値が IRT 値で、「能力値」と称されている。IRT 値は正答率よりも学生の真の能力を反映しているといわれる。この理論を適用するには十分な量のプール問題を用意することと、それが公開されていないことが前提となる。

ジャビー

JABEE Japan Accreditation Board for Engineering Education 日本技術者教育認定機構

大学や高専の技術者教育プログラムの審査・認定をおこなう機関で 1999 年に設立された。国際的に通用するエンジニアを養成するために、大学・高専における教育の質の向上を目指している。文部科学省が進めている大学の分野別認証評価のモデルとなっている。学習・教育の成果(アウトカムズ)を重視し、実地審査では、主要筆記試験の問題と答案、レポートなどをチェックして、目標達成度評価の妥当性が審査される。本学薬学部では、分野別認証評価が JABEE に準ずるかもしれないということで、全答案を保管している。

ジャクミー

JACME Japan Accreditation Council for Medical Education 日本医学教育認証評議会

日本の医科大学・医学部が国際的基準に則っているかどうかを審査する機構。文部科学省の「高等教育機関の質保証には分野別の認証評価が必要」という施策と、WHO による医育機関の質保証を求め動きに呼応して、全国医学部長要因超会議(AJMC) が母体となつてとして、2013 年 2 月に設立された。WHO の下部機関(WFME)評価機構として 2017年に認定された。以後、JACME が国内各大学の分野別認証評価の活動に入る。JACME の認証を受けることで、WFME のメタ認証を受けたことになる。→分野別認証評価、FAIMER、WFME

ケージェー

KJ 法

収集した情報や上げられた問題点を整理する方法。カードを使ってまとめていくが、同種の内容を集めたものを「島」と言い、島どうしの関係(依存関係、因果関係など)を矢印であわらす。開発者の ^{かわきた}川喜多二郎(文化人類学者)の頭文字をとって KJ 法と呼ばれている。グループ作業のワークショップなどで導

入時に使われることが多いが、一人でも論文を書く際にも応用できる。→SWOT 分析

LA Learning Assistant ラーニング・アシスタント

教育業務に携わる大学院生。TA が特定教科・講座に属して授業や実習の補助にあたるのに対し、LA はラーニングcommonsなどで学修支援にあたる。→TA

LC Learning commons

→ラーニング・commons

LTD Learning through discussion

能動学修教育で推奨される方法。学修者同士で議論させることで、教育効果を高めることを目的としている。あわせて傾聴の姿勢と協調性を高める。→能動学修、PBL、TBL

MCQ Multiple Choice Question 多肢選択問題

客観性が高く、信頼度も高く、多くの学生を均等に評価できることから用いられる試験形式。一般的には5つの選択肢から1つあるいは2～3の正答を選ぶが、EMI では選択肢が 20 個になることもある。「選べ。」という設問文では one best であり、複数選ばせる時はそれを明示しなくてはならない、選択肢の文は同じくらいの長さで、主文のみ(副文は無い)、キーワード選択ではアイウエオあるいはアルファベット順に並べる等のルールがある。ちなみに、医師・歯科医師国家試験では選択肢は a, b, c, d, e であるが、CBT では A, B, C, D, E で表記され、薬剤師と看護師の国家試験では 1, 2, 3, 4, 5 と数字で表されている。そのため、本学ではマークシートを2種類用意している。

Mind map

イギリスの著述家 Tony Buzan が開発した、思考の補助ツール。表現したい概念を中心に据えて、そこから放射状に連想やイメージをひろげてつなげていくもので、オリジナルでは手書きであるがコンピュータソフトも開発されている。マップを描く過程で、事象をジャンル毎に整理し、知識を有機的に接合する習慣を身につけることが出来る。階層化は必須ではなく、突飛な発想も許される。最終的に複雑に込み入った概念を短時間に理解できるとされている。なお、階層化を前提としたロジックツリーと違い、描かれる項目には重複も許される。→ロジックツリー

Mini-CEX Mini-Clinical Evaluation Exercise

臨床現場で主に態度を形成的に評価する方法で、もともとはアメリカの研修医評価に使われていた CEX をもとに簡略化したもの。日本の初期研修でも使われるようになっている。簡単な評価項目からなり、被評価者に即時的にその結果を返すことで振り返りによる成長を促す。→WBA

MOOC Massive Open Online Course

無料のオンライン授業システム。大学の教育はこれまでは大学内でおこなわれてきたが、e-learning を使うことで、キャンパス外でしかも大学に入学していない人も一流講義を聴講できるようになっている。ム

ークは、教育活動を仮想空間で実現させようという試みであり、学校教育のあり方を見直す(あるいは破壊する)ものとして着目されている。反転授業でも e-learning による講義を利用するが、これはあくまで予習講義を仮想講義室で受けるということであり、実空間での授業を無くしているわけではない。→反転授業

MSF Multisource Feedback 360 度評価

→WBA

OBE Outcome-Based Education 学習成果基盤型教育

長らく医学教育では GIO と SBOs で目標設定がなされてきたが、学士能力の保証を求められたことから、2000 年代後半からアウトカム(学修成果)基盤型学修(OBE)への移行が進められている。「○○のために、××する。」というスタイルで書かれている GIO を SBO に簡単に書きあらためるとしたら、「××をすることで、○○に到達する」というように倒置することで対処できる。OBE の方が、複数のコンピテンシー(プロとしてなすべき事柄)を記載できるので、カリキュラム全体に占めるコースの意義がわかりやすくなる。

オーバーバック

OPAC Online Public Access Catalogue オンライン蔵書目録

図書館の所蔵資料(図書、雑誌等)をオンラインで検索できる目録データベースのこと。所蔵資料の書誌情報(タイトル、著者名等)のほか、配架場所や利用の可否(貸出中かどうか等)を確認することができる。

オスキー

OSCE Objective Structured Clinical Examination オスキー 客観的臨床能力試験

臨床技能を見る試験で、イギリスで始められた。日本では臨床現場に出る前に「技能の質保証」を目的として CBT とともに行われるようになった。各大学で個別に受け継がれてきた技法をある程度共通化してきたと思われる。医学部では、Advanced OSCE と称して卒業時にレベルを上げた OSCE を実施する大学もあるが、その実態は各大学でまちまちである。ちなみに以前用いられていた Advanced OSCE という言葉は和製英語で、外国では通用しないことから、現在は Post-Clinical Clerkship OSCE (Post-CC OSCE)と呼ばれる。

PBL Project-Based Learning 課題解決型学習

あるテーマ(例えば地域医療の崩壊)について問題点を上げ、解決策を考える能動学修方法。経済学部などでは具体的な地域振興策などを考えさせ、産学連携教育としているが、医療系大学では、主にワークショップのやり方を覚える導入として使われることが多い。→能動学修、TBL

PBL Problem-Based Learning 問題解決型学習

能動学修方法の一つで、医学部においてはシナリオ(モデル症例)をベースにしたグループ学修を指

す。カナダのマックマスター大学で始められ、講義による授業を置き換える学修方法として全世界で導入された。学修者は議論することで、知識の積極的修得と協調性を高めることができる (Learning through discussion)。グループでは役割を固定化せずに、順繰りにリーダーや記録係を交替することが推奨される (Rond Robin 方式)。あらかじめ学生に具体的な到達目標を明示した自己学修資料をわたしておく必要があるが、日本ではその事前配付資料の作成が不十分であることが多い。また、各グループにチューター (あるいはファシリテーター) と呼ばれる教員を配する点、少人数学修用の小部屋を多数用意しなければならない点で、人的・物的資源を要求されることから、資源的余裕の乏しい地方医科大学では形骸化しているところもかなりある。大部屋の実習室で、教員を数人を配した複数グループのPBLが一般的になってきている。→能動学修、LTD、TBL、RR

^{オスキー}
PCC OSCE, Post-CC OSCE Post-clinical-clerkship OSCE 診療参加型実習後客観的臨床
能力試験

臨床実習後におこなう OSCE で、いわゆるアドバンスド・オスキー (この言葉は和製業界英語)。心電図やエコー、放射線画像の読影とそれに即した検査や治療方針の立案なども求められる。将来的 (平成 30-31 年頃) にはこれを義務化の方向に持って行きたいというのが、文部科学省の考えであるが、人的物的資源が保証されるか、疑問。

PhCAT Pharmaceutical Common Achievement Test organization 薬学共用試験センター
薬学の共用試験 (CBTとOSCE) を取り扱う法人。医学と歯学の共用試験は共用試験実施機構 CATO がおこなっている。→CBT, OSCE, CATO

^{ピサ}
PISA Programme for International Student Assessment ピサ

経済協力開発機構 (OECD: Organization for Economic Co-operation and Development) が進めている国際的な学習到達度に関する調査。日本では国立教育政策研究所が調査の実施を担当している。15 歳児を対象に、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの三分野について3年ごとに調査を実施している。ゆとり教育導入とともに低下した国別ランキングは、2012 年には回復基調にある (数学的リテラシー7位、読解力3位、科学的リテラシー3位)。OECD 加盟国に比べ、非加盟国で経済的に活力の高い国・地域 (上海、シンガポール、香港、台湾) が上位を占める。こうした統計データをみると、国際的にみて日本の初等中等教育は、教育モデルとして定評のあるフィンランド以上に良いと評価できるが、大学全入時代に突入した日本では、大学教員は学生の著しい Study skill の低下に悩んでいる。

RA Research Assistant リサーチ・アシスタント
大学院生に研究の補助を頼み、対価として手当てを支給する制度。→TA

RR Round Robin ラウンド・ロビン
グループの構成メンバーで、役割を固定化せずに順繰りに交替する方法。もともとはフランスの王に嘆願書を出すときに、リーダーが誰かわからないようにするために、署名したリボン (輪) を輪のようにした故事に

由来するらしい。→能動学修、PBL

^{ルンバ}
RUMBA Real, Understandable, Measureable, Behavioral, Achiveable

目標設定する際に留意すべき観点を表したもの。→教授目標(分類)

Real 現実的で、学修者の到達するアウトカムを具体的に示す

Understandable 学修者と評価者の双方が理解できる

Measurable 達成度が評価できる

Behavioral 認知領域、精神運動領域、情意領域の各領域での行動的表現となっている

Achievable 達成可能である。

例えば、本学の指針である「誠の医師を目指す」という目的は、理念としては良いが、非現実的で定義も曖昧。その達成度は測定しにくいし、具体的な行動目標にはなりにくい。しかし、「レントゲン画像診断で異常陰影を発見できる」というのは、評価可能な具体的行動で、個々の授業(実習)の目標となる。

^{リップルス}
RIPLS Readiness for Interprofessional Learning Scale

IPE/IPW の施行にあたって、受講者がどれだけの準備をしているかを調べるテスト→IPE, IPW, レディネス

Curran, V. R., Sharpe, D., Forristall, J., and Flynn, K.; Attitudes of health sciences students towards interprofessional teamwork and education. *Learning in Health and Social Care*, 7(3), 146- 156. (2008)

SA Student Assistant スチューデント・アシスタント

学部教育におけるきめ細かい指導を実現する目的で、優秀な学部学生に教育業務を手伝ってもらう制度。学修相談室における助言、あるいは学部学生(下級生)に対する講義や演習、実験に関する教育補助業務を行う。金銭的補助をおこなうのが一般的である。本学ではどの学部でも上級学年ほどカリキュラムがタイトであり、授業支援は事実上不可能である。臨床実習における屋根瓦方式の指導は、今のところ金銭的補助が無いので SA 制度とは言えない。放課後の学修相談室は、大学の授業についていけない学生や、ハンディキャップのある学生に対しての支援に有効だと思われる。

^{エスバー}
SBAR Situation, Background, Assessment, Recommendation

主に看護の現場で使われる用語で、医療チームスタッフ何かを伝える際の要点を表したもの。もともとは原子力潜水艦の中での事故発生における報告方法として開発され、次いで航空機産業、そして医療界で用いられるようになった。何かを報告する際には、自分が誰でどんな状況にあるかを述べ(Situation)、対象となる患者のこれまでの概要を伝え(Background)、自分なりの評価を述べ(Assessment)、意見を具申する(Recommendation)ようにする。例えば、「研修医の〇〇です。4階病棟に狭心症で3日前から入院している82歳の××さんですが、5分前から激しい胸痛を訴えています。頻脈と冷汗もあります。心筋梗塞が疑われるので、すぐ来ていただけますか。また至急しなければならぬ処置を御指示下さい。」看護に限らず、複数人で何かする場合には心がける事であろう。

SBO Specific Behavioral Objective 個別行動目標

コースで学生が到達すべき具体的な目標で、学生目線で記載する。GIOとともにシラバスに記載する。概念的な動詞(例えば、理解する)ではなく、観察可能で行動を具体的に表す動詞(説明できる、列挙できる、図示できる、等)といった動詞を用いて記載すること。但し、非系統的なSBOの羅列は、却って学生に「最終的な目標は何なの?」という疑問を抱かせることになる。→教授目標分類(動詞)

SD Staff development スタッフ・ディベロップメント

事務職員を対象としたスキル向上プログラムのこと。教員向けのFDとペアで使われることが多い。
→FD

^{ソープ}SOAP Subject, Object, Assessment, Plan

問題指向型の診療記録の書式の1つで、Subject(主観的データ)、Object(客観データ)、Assessment(評価)、Plan(計画)を記すやりかた。

^{スオット}SWOT分析

→高等教育におけるビジネス業界由来の用語

SP Simulated Patient, Standardized Patient 模擬患者、標準患者

実際の患者ではなく、診療・診察・服薬指導などの訓練をおこなうための擬似的な患者。看護師、学生同士がSPとなることが多いが、一般市民にボランティアとしてSPになってもらうときにはある程度の事前訓練が必要。常に安定した演技(応対)ができて、信頼性が高い評価を可能とする模擬患者を「標準患者」ということもある。

TA Teaching Assistant ティーチング・アシスタント

教育補助業務を行わせ、大学院生の教育トレーニングの機会を提供するとともに、これに対する手当を支給し、大学院生の処遇改善の一助とすることを目的としたもの。我が国のTAの数は8万人(平成18(2006)年度の文部科学省調査)であるが、その内訳を見ると、各講座・研究科に属して実験・実習等、自然科学系での活用が中心になっているなどの傾向がある。また、大学院でなく、学士課程の学生を教育の補助業務に携わらせる場合、TAとは区別してスチューデント・アシスタント(SA)と称することが多い。(文部科学省用語集より) また、講座に属さず、大学内の学生支援機構に属して、図書館やラーニングcommonsで勉学の補助にあたる大学院生をLAと称する場合もある。→RA, SA, LA

TBL Team Based Learning チーム基盤型学習

1970年代後半、オクラホマ大学のLarry K. Michaelsen博士が大人数の学生向けに編み出した能動学習法。

以下の6ステップからなる。

①学生には領域を決めて予習させる。→②個々の学生の習得度を多肢選択問題などで査定する

(iRAT)。→③チームで同じテストを議論しながら解かせる。スクラッチカードやレスポンスアナライザーを使って、即時的に正答を提示する。→④チームの誤答を弁護する(アピールする)。→⑤教員は適宜、補足説明を行う。→⑥応用課題をチームでおこなう。評価は、iRAT と gRAT およびチーム内の貢献度相互評価、並びに統括評価でおこなう。

もともと能動的勉強意欲の乏しい学生には不向きで、途中で脱落していくことが多い。落ちこぼれ学生を救うというよりは見捨てることになる。

→能動学修、PBL

TBL Task-Based Learning タスク基盤型学修 (Harden et al., 2000)

医師が実践するであろう一連のタスクについての学修をベースにしたもの。臨床実習における統合的学習ならびに PBL に効果的な学習方略。

TDM Therapeutic Drug Monitoring 治療薬物モニタリング

THE times higher education world university rankings

→タイムズ・ハイヤー・エデュケーション大学ランキング

TP Teaching Portfolio

→ポートフォリオ

USMLE United States Medical Licensing Examination

アメリカの医師資格試験。STEP1～3 の3段階あり、Step1 は基礎医学分野から、STEP2 は臨床医学分野からの出題で、Step2 は更に Step2CK(Clinical Knowledge: 臨床知識)と Step2CS(Clinical Skills: 臨床技能)によって構成されている。Step3 は、総合的な医療知識と実践に関する試験である。臨床医志向の試験のため、Step1で問われる内容は基礎生命科学領域であるとはいえ、症例ベースの問題となっている。

WBA Workplace-Based Assessment, work-based assessment

実際の作業現場における評価方法のことで、臨床パフォーマンス評価(CPX)の一つ。Student Doctor や研修医を臨床現場で評価する方法として、ルーブリックやポートフォリオの他に WBA の導入がおこなわれようとしている。複数の評価者による多面的評価(いわゆる 360 度評価;MSF)が求められている。DOPS(Direct observation of practical skills)、Mini-PAT(Mini-Peer Assessment Tool)、Mini-CEX、P-MEX などが開発されている。→パフォーマンス評価、ポートフォリオ、ルーブリック、DOPS、EPA、Mini-CEX、MSF

WFME World Federation for Medical Education 世界医学教育連盟

WHO の下部機関で、医学教育に関する国際的な教育の質保証基準を定めている(学部、卒後研修、生涯教育の3ステップ)。各国の事情に合わせた基準を設けており、絶対要件とした基本水準(B)は発

展途上国で求められるもので、先進国では更に質的向上のための水準(Q)の達成が望まれている。日本の医学分野別認証評価基準は、この WFME をもとになると思われることから、本学医学部の DP では、この基準を満足するような文言に変更された(平成 26 年度)。なお、分野別認証評価では 72 週がスタンダードと言われているが、そうした数値目標は WFME の基準にはない(アメリカのカリフォルニア州では、72 週という数字が明記されているが、国際的なものではない。)。日本の医育機関は、文部科学省の方針で分野別認証評価を受けることになるが、医学部は WFME のメタ認証を受けた JACME から認証を受けることになる。→分野別認証評価、JACME

WS Workshop ワークショップ

複数人で、何かしらの成果物を作り上げる研修のやりた。FDでしばしば用いられる。少人数作業と、全体講義・発表会を組み合わせおこなわれることが多い。能動学修の一つとして使われることもある。→能動学修、FD、LTD

【カタカナ用語】

3つのポリシー

文部科学省が主導して、各大学の個性・特色の根幹をなすものとして整備を求めているもの。DP:ディプロマポリシー(学位授与の方針)、CP:カリキュラムポリシー(教育課程編成・実施の方針)、及びAP:アドミッションポリシー(入学者受入れの方針)の3つからなる。→AP, CP, DP

アウトカム Outcome 学修成果

教育課程においては、学修コースを終えた際に、何ができるようになったのかを記すことが求められており、それをアウトカムと称する。アウトカムは、知識のみならず態度・技能も含めたものになっている。コンピテンスと同義とする人もいる。一般目標(GIO:General Instructional Objectives)は文字通り「目標」であるのに対し、アウトカムは「出口における質保証」を意識したものになっている。各コースのアウトカムの集大成が、ディプロマ・ポリシーとなる。→DP, GIO, OBE、コンピテンス

アカデミック・カフェ Academic café

喫茶店+ラーニング commons のこと。学生と教職員が飲食しながら学術活動できる場。→ラーニング commons

アクティブ・ラーニング Active learning

→能動学修、LTD、PBL、RR、TBL

アセスメント・テスト Assessment test 学修到達度調査

学修成果の測定・把握の手段の一つ。ペーパーテスト等により学生の知識・能力等を測定する方法の総称で、標準化テストとも呼ばれる。米国で導入されているアセスメント・テストは、一般に、大学内で抽出された低学年・高学年双方の学生が受験し、その点数の推移等で大学の教育効果を把握する目的で導入されているものであり、学生個々人の能力を判定するものとは異なる。(文部科学省用語集より)

アセスメントプラン

→アセスメント・ポリシー

アセスメント・ポリシー Assessment policy 評価指針

学生の学修成果(アウトカム)を評価する際に、どんな方法でおこなうかを明示したもの。例えば、「国家試験合格を達成するだけの知識と知恵を身につけたかどうかを、客観的筆記試験で評価し、態度技能は実習ポートフォリオで評価する」などと記すことになる。今後、カリキュラムポリシーやディプロマポリシーと連携させて、これを明示するように求められる。

文部科学省は、2020年の「教学マネジメント指針用語解説」では、アセスメント・ポリシーをアセスメントプラン、と言い替えている。これは、評価の指針というよりは具体的方法を各大学の教学マネジメントに盛り込みたい、という意向明記させたいということだ

アドバンスド・オスキー Advanced OSCE

臨床実習後の客観的臨床技能試験(Post clinical-clerkship OSCE)を指す。共用試験の OSCE と区別するために日本ではこの用語が用いられていたが、和製英語である点と、何が Advanced なのか定義がはっきりしないことから、使われなくなってきている。→Post-CC OSCE

アニュアル・レポート 年次報告書

もともとは、企業の事業報告書で、政府から出している年次報告は白書。文部科学省は大学にもこうした報告書の作成を求めつつある。

株式を上場・店頭公開している企業が事業年度終了後に作成する財務諸表等を記載した報告書。主に海外の株主・投資家や金融機関等取引先に向け、ディスクロージャー(情報公開)という観点から経営内容についての総合的な情報を掲載している。インターネットで閲覧できる企業も多い。法律で定められた決算短信や有価証券報告書とは異なり、企業の個性が見えやすく、また長期投資で重要となる企業のビジョン、社風、経営者の考え方、戦略、社員の状況、顧客の満足度等、財務諸表には出てこない「見えない資産」を把握することができる。(文部科学省用語集より)

アンドラゴジー Andragogy 成人教育

米国の Malcolm S. Knowles により、概念が作られた。成人教育の特徴：1)成人は自分たちが学ぶことについてその計画と評価に直接関わる必要がある（自己概念と学習への動機付け）、2)（失敗も含めた）経験が学習活動の基盤を提供してくれる（経験）、3) 成人は自分たちの職業や暮らしに直接重要と思われるようなテーマについて学ぶことに最も興味を示す（学習へのレディネス）、4)成人の学習は、学習内容中心型ではなく、問題中心型である（学習への方向付け）。成人に対する教育は、子供に対する教育（ペタゴジー）とは明瞭に区別すべきで、学生の自律性を尊重するのが良いといわれている。認証評価においてもこうした観点からの教育システムの構築が求められている。→ペタゴジー

インストラクショナルデザイン Instructional design

→ID

エスバー SBAR

→SBAR

エンパワーメント empowerment

看護学でよく使われる言葉である。もともとは17世紀に法律用語として、公的な権威や法律的な権限を与える意味で用いられた。転じて、現代の企業では、上司が部下に権限を与えてやる気を引き出すやり方としてこの言葉が使われており、企業組織運営のキーワードとなっている。医療現場では、患者（特に慢性疾患の患者）は、自己の状態をコントロールできないことから無力感を覚えることが多く、その無力感は病気の回復を遅らせてしまう。そこで、患者に「自分で何かを決定してやることができる」という自

律感を実感してもらうことが大切になり、それをエンパワメントと称するようになった。

オーベン oben(ドイツ語 上の)から転じた医学業界用語 指導医、上級医

→【ドイツ語由来の業界用語】

オルタナティブ評価 Alternative assessment

認知領域(知識量、問題解決能力)のように客観テストで点数化できる評価(これを「心理測定学に基づく評価」と称する)に対して、高次の複合能力(言い替えれば、コンピテンス)を評価するためには別の(alternative)評価方法が必要であろう、ということで提案されたもの。パフォーマンス評価、WBA やポートフォリオ評価がこれに含まれる。

カリキュラム Curriculum 教育課程

学修成果(アウトカム)を達成する上で設計された複数のコースによって構成された系統的まとまりのこと。個々の授業内容を記したものはシラバスであり、それに対してカリキュラムはコースをどのように配列したかを表す。→CP、カリキュラムマップ

- コース
一定のテーマで連続した授業のまとまりのこと。医療系大学では、科目に相当する。
- ユニット
一つのコース(科目)の中で、関連する内容を扱う授業数回分のまとまり。
- 授業
講義、演習、グループワーク、実習などによる 1 回性のある教育活動の総体。モジュールとも言う。

(参考 大学教員のための授業方法とデザイン)

例

カリキュラム 岩手医科大学医学部基礎医学の概要

科目(コース):臨床解剖学(2年後期)

ユニット:第一節 上下肢の筋肉と神経(○月○日～×月×日の実習)

授業:上肢屈側の解剖(○月○日 3,4 時間目の実習)

カリキュラム・マップ Curriculum Map 履修系統図

学位授与方針の学修成果を達成するにあたって、各科目(コース)がどのように位置づけられているかを示した表。図式化したものをカリキュラム・フローチャートと称し、個々の授業の関係を明示する。図式化することで、大学全体のカリキュラム・ポリシーがわかりやすく表現される。→CP、カリキュラム

クリニカル・クラークシップ Clinical clerkship

学生が医療チームの一員として実際の診療に参加し、より実践的な臨床能力を身に付ける臨床参加型実習のことで、患者と実際に向き合うことから、臨床実習の望ましい形と見なされている。ポリクリに対比

して、クリクラと略して呼ぶ人もいる。実際の医療現場で活動することから、臨床実習に入る前に共用試験をおこない、医学生としての質保証を図っている。一方、平成 32 年頃には、CC 終了時に到達目標に達したかどうかを審査する Post CC-OSCE が求められるようになるかもしれない。なお、シラバス上はクリクラを唱っていても実際は見学型に終止している場合もあり、分野別認証評価ではその辺を突っ込んで審査されるであろう。→BSL、PCC-OSCE、ポリクリ、共用試験

ゴーレム効果 Golem effect

教師が学修者に対して抱く期待度が低ければ低いほど、学修者の成果は落ちるという現象。実際「貴方に期待するものは何も無い」と親や教師から存在を無視された生徒は、本来の力を発揮することなく低いレベルで成長が止まってしまう、自殺することさえある。ゴーレムとはユダヤの伝説にある泥人形のこと、呪文で動いているが護符を取ると土に戻ってしまう。このことから、ピグマリオン効果に対して、ゴーレム効果と名付けられた。→ピグマリオン効果

コンピテンシー、コンピテンス Competency, Competence(具体的)実践能力

良い医療人は、知識・技能に加え、よりよく医療を行うための行動(言葉使い、気配り、コミュニケーション、調整能力等)が優れており、こうした能力を表す言葉として、コンピテンスあるいはコンピテンシーという言葉が用いられている。文部科学省の用語集では「単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求(課題)に対応することができる力」と述べられているが、これでは何を言っているのかよくわからない。要は、計算能力や推理力、読解力あるいは企画力などの個々の能力(ability)に対し、「実社会で働く上で、優れた行動を取る総合能力」を表す言葉ということであろう。生命科学における用語の、「遺伝子」に対する「ゲノム」のような包括的概念とも言える。但し、ビジネス業界、教育界などいろんなところで使われるため、共通の定義は未だに無い。従って厳密に使い分ける必要は無いはずである。ただし、日本の医学教育では、コンピテンスは概念的なもので、実際の行動(パフォーマンス)で評価されるものをコンピテンシーと定めている。言い替えれば、個々の具体的行動項目がコンピテンシーで、それらを複合した上位領域をコンピテンスとしている。JACME の認証評価でもこれに則ることになる。ちなみに日本語訳は無く、強いて言えば「実践能力」という語をあてはめることができると思うが、コンピテンスあるいはコンピテンシーというカタカナ語がそのまま用いられている。→パフォーマンス評価、WBA

● キー・コンピテンシー

- ① 社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力(言語、シンボル、テキストを活用する能力、知識や情報を活用する能力、テクノロジーを活用する能力)
- ② 多様な集団における人間関係形成能力(他人と円滑に人間関係を構築する能力、協調する能力、利害の対立を御し、解決する能力)
- ③ 自立的に行動する能力(大局的に行動する能力、人生設計や個人の計画を作り実行する能力、権利、利害、責任、限界、ニーズを表明する能力)(文部科学省資料より)

ザール der Saal(ドイツ語 広間)から転じた医学業界用語 手術室

→【ドイツ語由来の業界用語】

シャドウイング Shadowing

ベッドサイドの実習で、先輩看護師の後を学生が影のように付いて回り、業務について学ぶ方法。おもに看護教育で使われる用語である。

シラバス Syllabus 授業計画書

コースを構成する個々の授業内容を示したもので、学生が予習できるように書かれていなければならない。評価方法やオフィスアワー、教科書や参考書、授業の場所、学修成果と到達目標も記す。学生との契約書と見なすこともできるので、シラバスを無視した授業をしてはいけない(はず)。もともとアメリカの大学で配布されていたシラバスは、内容も含めて各科目ごとの自由裁量に任せられるものであったが、文部科学省の指導により(下記参照)、日本においては全ての授業科目において統一された書式で網羅的に各種事項が書かれたものをもとに電話帳のような分厚い冊子を年度毎に出版するのが一般的となった。そうした冊子は利便性に欠けることから、本学では学年毎の小冊子形態としている。今は電子シラバスも並行して運用している大学も多い。→カリキュラム

各授業科目の詳細な授業計画。一般に、大学の授業名、担当教員名、講義目的、各回ごとの授業内容、成績評価方法・基準、準備学習等についての具体的な指示、教科書・参考文献、履修条件等が記されており、学生が書く授業科目の準備学習等を進めるための基本となるもの。また、学生が講義の履修を決める際の資料になるとともに、教員相互の授業内容の調整、学生による授業評価等にも使われる。アメリカでは、教員と学生の契約書とされている例もある。授業内容の概要を総覧する資料(いわゆるコース・カタログ)とは異なり、科目の到達目標や学生の学修内容、準備学修の内容、成績評価の方法・基準の明示が求められる。(文部科学省用語集より)

セメスター Semester 学期

1年を夏学期と冬学期に分けた教育課程。もともとはラテン語の *semetris* に由来する(se 六+ metris 月)。大学教育はだいたいこれを踏襲しているが、本学のような医療系大学では、通年あるいは学年をまたいだコースを設定することもあり、意味はあまりない。グローバルスタンダードの名の下に大学の秋入学制度を導入しようとしている人々にとってはセメスター制の本格導入が重要案件となっており、文部科学省も「多様な学びの場の提供」という施策誘導として、セメスター制の導入を謀っている。尤も、日本の医療系大学では6年(4年)一貫教育の名の下で、実験・実習も含めたカリキュラム構成をしているところであり、資格試験も一年に一度だけであることから、本格導入は極めて困難といえる。

タイムズ・ハイヤー・エデュケーション大学ランキング times higher education world university rankings (THE)

タイムズ・ハイヤー・エデュケーションはイギリスのタイムズが発行している高等教育情報誌で、そこが中心となって世界中の大学をランク付けしたものが THE ランキングである。ランク付けは大学が THE に

依頼しておこなわれる。大学から出される査読論文数、教員一人当たりの論文被引用件数、教員対学生比率、外国人教員比率、外国人学生比率等をもとに算出している。国別、領域別のランキングも出されており、最近はこのランキングを PR 材料として用いて、学生募集をおこなっている大学も増えている。
<https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings>

タキソミー I、II、III Taxonomy 評価領域分類

医学教育学業界用語の一つ。認知領域の評価をする問題を作成する際に、留意すべき3段階を指す。I型は知識の想起、II型は理解・解釈、III型は問題解決能力を示す。段階が高いものを問うほど良問とされるが、問題作成は難しいし、基本知識を問う場合は、当然、I型になる。図を加えることで、II型になる。→教授目標

ディプロマ・サプリメント Diploma supplement

→Diploma supplement

ナンバリング Numbering ナンバリング、あるいはコース・ナンバリング。

各授業科目に教育内容や程度を表す数字をつけて分類すること。図書館に所蔵されている本に付けられている整理番号のようなもの。他大学との単位互換や授業を選択する上で役に立つが、殆ど必修科目ばかりで、しかもモデルコアカリキュラムに沿って授業内容を規定されている日本の医療系の学部教育においては、あまり意味をもたないが、一般教養や大学院教育では、あったほうが良いかもしれない。

授業科目に適切な番号を付し分類することで、学習の段階や順序等を表し、教育課程の体系性を明示する仕組み。本来的には、①大学内における授業科目の分類、②複数大学間での授業科目の共通分類という二つの意味を持つ。対象とするレベル(学年等)や学問の分類を示すことは、学生が適切な授業科目を選択する助けとなる。また、科目同士の整理・統合と連携により教員が個々の科目の充実に注力できるといった効果も期待できる。(文部科学省用語集より)

パス・ファインダー

特定のテーマに関する情報を探するための手がかりとなる図書館資料やウェブサイト等を簡潔にまとめた初心者向けガイドのこと。従来は一枚もののリーフレット形式だったが、近年ではインターネット上でも提供されている。テーマとしては、利用者からよくある質問に関するものや、授業内容に沿ったもの等がある。(文部科学省資料より)

パフォーマンス評価 Performance assessment

実際の作業現場あるいはそれをシミュレートしたところで行動・技能を評価するやり方。コンピテンスそのものは能力であり、それを直接見ることはできないが、観察可能な実際の行動(パフォーマンス)から推察できることから、パフォーマンス評価がおこなわれるようになった。いわゆるプロフェッショナルリズム教育の評価にあたっては、パフォーマンス評価法をつかうことになる。

用語を整理すると...

パフォーマンス評価(広義の CPX)

- 実際の臨床現; WBA
- 臨床現場シミュレーション
 - ◇ 短い時間での技能評価; OSCE
 - ◇ 長い時間をかけた態度技能評価; CPX(狭義)

→オルタナティブ評価、CPX、OSCE、WBA

ハンドアウト Handout 印刷配布物

授業・実習の際に配る印刷物。簡単な流れに留めておく場合を、ハンドアウトと称して、詳細なレジュメと区別する場合もあるが、境界ははっきりしない。

ピグマリオン効果 Pygmalion effect

人間は期待されると、成果を出す傾向がある。1964年にアメリカの Robert Rosenthal が小学校を舞台とした心理実験で、教師により期待された生徒ほど成績が伸びたことを報告した。ピグマリオンは女性の彫像に恋したギリシャ神話に出てくる王の名前で、神は王の期待に応じて彫像を生身の女性に変えたということから、ピグマリオン効果と呼ばれる。報告者の名をとって、ローゼンタール効果とも言われる。しばしば、「褒めて伸ばせ」と解釈されるが、期待もしていないのに上っ面だけ、「凄い」「素晴らしい」と褒めても何の効果もない。相手を本心から信頼し、期待することが大事であろう。→ゴーレム効果

ビーコン wiederkommen(ドイツ語 再び来る)から転じた医学業界用語 再試験

→【ドイツ語由来の業界用語】

ビブリオバトル Bibliobattle(造語)

知的書評合戦のこと。自分の読んだ本の面白さを一定時間内に聴衆に訴えて、いかに興味を引き付けるかを競うもの。2007年に京都大学の谷口忠大によって考案されたもので、学生の図書離れに対処し、プレゼン能力を向上させる意義が認められ、大学の教養教育などで導入されつつある。本学では2014年から導入された。

ファシリテーター Facilitator

ワークショップなどで、グループ全員を参加させて成果を上げるように助言を適宜与える役目を帯びた者。PBLにおける Tutor は、最近ではファシリテーターと呼ばれるようになった。FDのワークショップの企画に協力した人、あるいはFDの基調講演者として招かれた外部講師などは、しばしばタスクフォースと呼ばれることもある。

プリセプター Preceptor

もともとは教育者という意味であるが、看護系では看護の現場で初心者(プリセプティー preceptee)を教導する先輩看護師のことを指す。後輩を教えることで先輩も育つ、ということから、プリセプター制度を

導入しているところも多い。なお、業種を問わずに、新人研修において個人的悩みまで相談に乗る先輩を一般的にはメンターと称する。ちなみに、初期研修医を指導する指導医や後期研修医のことをオーベンと言うことがある。→オーベン、メンター

プリント Print 印刷配布物

授業・実習の際に配る印刷物の総称。ハンドアウトやレジュメという言葉を用いることもある。著作権に触れる図版を使用しても、授業中の印刷配布であれば問題は無い。しかし e-learning のシステムに載せることは今のところ許されていない(たとえ、ユーザーアクセス制限をかけていても、不可である)。

ペダゴギー Pedagogy 教育学

とりわけ子供に対する教育のことで、教師が主導しておこなわれるのが前提。成人教育(アンドラゴジー)と対比される。→アンドラゴジー

ポートフォリオ Portfolio 成果記録帳

もともとは、自分の成果をとりまとめて第三者に呈示するファイルのこと。転じて、会社の概要を示す事業ポートフォリオや学修者・教育者のポートフォリオなど、いろんな領域で使われている。実験ノートもポートフォリオの一種であろう。学修者の学修ポートフォリオに対し、教員側の教育資料等は教員ポートフォリオと称する。振り返り(省察)をすることで、知識の定着と態度・技能の向上を図ることができるとともに、指導者からの助言が得やすくなる。但し、統括評価に使うだけの信頼性を持ったポートフォリオ評価は、人的余裕が無いと難しい。目的が、振り返りと助言なのであれば、ザックリとした大まかな評価でも構わないであろう。

● 学修ポートフォリオ Learning portfolio, Assessment Portfolio 学修成果記録帳

学生や研修医が、自らの学修を記録したもの。具体的なイメージとすれば、レポートやスケッチ、講義ノート、ハンドアウトなどをまとめたもの。日々の学修成果を指導者は評価して助言を与え、学修者は振り返り(省察)をすることで、成長を促す効果があるとされる。実習評価に使われることが多いが、あまりに厳密に過ぎると評価者と被評価者の双方が疲弊してしまう。学修者の振り返りにつかうものを Learning Portfolio、統括評価に使うものを Assessment ということもある。

学生が、学修過程ならびに各種の学修成果(例えば、学修目標・学修計画表とチェックシート、課題達成のために収集した資料や遂行状況、レポート、成績単位取得表など)を長期にわたって収集し、記録したもの。それらを必要に応じて系統的に選択し、学修過程を含めて到達度を評価し、次に取り組むべき課題をみつけてステップアップを図るといふ、学生自身の自己省察を可能とすることにより、自律的な学修をより深化させることを目的とする。従来の到達度評価では測定できない個人能力の質的評価を行うことが意図されているとともに、教員や大学が、組織としての教育の成果を評価する場合にも利用される。(文部科学省用語集より)

● 教員ポートフォリオ Teaching portfolio 教授記録帳

教員活動の記録で、講義・実習に使用した教材、テスト、ハンドアウトなどをまとめたファイル。今後は教員評価に際し、提出を求められるかも知れない。ハードディスクにこうした資料を保存しておくが良い。

ポリクリ die Poliklinik (ドイツ語 総合診療病院)から転じた医学業界用語 臨床実習

→【ドイツ語由来の業界用語】

マイルストーン Milestone (ドイツの業界用語 言葉による治療)を縮小した日本の医学業界用語

コンピテンシーを達成するにあたって、その道程を示すもの。一人で出来るような事項は EPAs となる。

→EPAs、コンピテンシー

ムンテラ Mundtherapie 到達指標

→【ドイツ語由来の業界用語】

ムント die mündliche Prüfung (ドイツ語 口頭試問)を縮小した日本の医学業界用語口頭試問

→【ドイツ語由来の業界用語】

メンター Mentor 指導者・助言者

映画のスターウォーズにおけるヨーダのような「魂の師」を指す言葉。転じて、大学教育では初心者教員の悩みを聞いて助言を与えるベテラン教員を指す。相談する方を、メンティー mentee と称する。Teaching Portfolio をもとに助言を与える人をメンターと称する場合もある。2014 年時点では、はっきりと制度化されているわけではないが、文科省はメンター制度の導入を図っているように見受けられる。長崎医大学では初期研修医 2 名にメンター 1 名を配している。

モンスター・ペアレント

子どもに過保護で、教員に自分勝手な理屈でクレームをつける親のこと。日本のマスコミが作った言葉のようである。初等教育の現場で有名になったが、本学においても、「出席しないのは大学が子どもに声かけをしてくれないからだ」「欠席を目こぼしてくれ」あるいは「CBT の点数をまけてくれ」などと言う親が増えてきている。こうした親は、ともすれば医学部長や学長、理事長に会いたがるが、取り次ぐことで更にクレームが増大する傾向があるので、第一線の部署で事務員と教員とで記録を取りながら対処するのが良い(決して、一人で会ってはいけない)。ちなみに、この言葉は和製英語と思われ、アメリカではヘリコプター・ペアレント(Helicopter parent; 子供が困った状態になるとヘリコプター機動部隊のように親が出現する)と称している。

ユニバーサル・デザイン Universal design 万人向けデザイン

身体的ハンディキャップ、宗教、性差(含、性同一性障がい)利き手などの差異と無関係に、全ての人が利用することができる施設や什器の設計・デザインのこと。大学は、いろんな背景と能力を有する学生

に対して等しく学修の機会を与える責務があることから、随所にユニバーサル・デザインを求められている。例えば、通常の歯科診療のユニットは右利き用に作られているが、米国製のものでは左利きにも使えるものが開発されている。尤も、コスト的な制限や大学の使命が異なるので、「できれば望ましい」という努力目標となっている。例えば、本学キャンパスでは、医療系学部には目の不自由な方は入学していないので点字マークは限られた場所にしかない。また、性同一性障がい者のためのトイレは、車イス用のものを流用している。

ライヘ die Leiche (ドイツ語 死体) 医学業界用語 解剖体
→【ドイツ語由来の業界用語】

ラウンド・ロビン Round Robin
→RR

ラーニング・コモンズ Learning commons 共同学修域

複数の学生が集まって、電子情報も印刷物も含めた様々な情報資源から得られる情報を用いて議論を進めていく学習スタイルを可能にする「場」を提供するもの。その際、コンピュータ設備や印刷物を提供するだけでなく、それらを使った学生の自学自習を支援する図書館職員によるサービスも提供する。日本では、一般的に図書館の一角に作られることが多いが、本学では図書館とともに全学教育推進機構が主導して作ってきた。

ルーブリック Rubric 多段階技能態度到達表

実習時の技術や行動の質を評価する評価基準表のこと。ふつう、評価観点(何を見るか)×レベルという二次元表で描かれている。もともとは、教会の礼拝をおこなう際の言動を指示した注釈が、朱書き印刷されていたことに由来する(rub-は、ラテン語の赤を意味する)。主観的になりがちな行動や態度技能の評価を客観的におこなうためには、評価者と学修者の双方に到達目標を明らかにした方が良いことから、1970年代にニューヨーク州で、高校生の学修到達度を多面的に評価するツールとして「段階的到達目標の表」が作られた。それをルーブリックと称した。医学教育では、知識のみならず、医行為や態度・技能、コミュニケーション力等も評価対象になることから、ルーブリック評価が用いられるようになってきた。臨床実習の充実化は、ルーブリック評価をきちんと運用するかどうかにかかっている。

米国で開発された学修評価の基準の作成方法であり、評価水準である「尺度」と、尺度を満たした場合の「特徴の記述」で構成される。記述により達成水準等が明確化されることにより、他の手段では困難な、パフォーマンス等の定性的な評価に向くとされ、評価者・被評価者の認識の共有、複数の評価者による評価の標準化等のメリットがある。コースや授業科目、課題(レポート)などの単位で設定することができる。国内においても、個別の授業科目における成績評価等で活用されているが、それに留まらず組織や機関のパフォーマンスを評価する手段とすることもでき、米国 AAC&U (Association of American Colleges & Universities) では複数機関間で共通に活用することが可能な指標の開発が進められて

いる。(文部科学省用語集より)

レジюме resume(フランス語) 印刷配布物

授業・実習の際に配る印刷物。授業内容を詳細に記した場合をレジюмеと称して、簡単な流れしか記していないハンドアウトと区別する場合もあるが、境界ははっきりしない。

レジリエンス resilience 自発的な精神回復力

心理学用語の一つで、脆弱性(vulnerability)の反対の概念。特に訳語は無く、レジリエンスと表記して用いることが多いが、俗語ではあるものの、「精神的打たれ強さ」と記載したほうがわかりやすいと思う。

レディネス Readiness 準備対応状況

教育の世界では、或る教育課程を受けるにあたって、どれだけの準備がなされているか、という文脈で、使われることが多い。また、或る教育課程を受けるにあたって、学生の態度・能力がどの程度準備されているかを査定するテストを Readiness Assessment と言う。例えば、IPE/IPW の施行にあたって、レディネスを調べる ^{リップルス}RIPLSなどがこれにあたる。→IPE, IPW, RIPLS

【日本語ではあるがよくわからない言葉】

学修行動調査

学生の行動や満足度に関するアンケートを基本とした調査。複数大学の学生を対象に共通の質問項目で調査を実施することにより、学部間・大学間の状況比較や、学年進行に伴う変化の把握、学内の他のデータ(成績等)と組み合わせて各種の分析に役立てるために開発されたものである。米国で広範に導入されている NSSE, CIRP 等がこれに当たる。米国ではフルタイム・パートタイムの別、幅広い年齢層、4,600 以上の高等教育機関それぞれの目的・性格の違い等を考慮し、「学生の行動にどのような変容を及ぼしたか」という観点での行動調査が行われるようになった。(文部科学省用語集より)

岩手医科大学では、全学教育推進機構が全学生を対象に毎年調査しており、岩手医科大学ファクトブックとしてホームページ上に公開している。調査項目は他大学でも一般的に行われているものであり、他大学との比較も可能となっているが、むしろ学部間あるいは学年間の相違と推移を調べるものとなっている。

機関別認証評価

→認証評価

機関リポジトリ Repository

教育・研究機関が知的生産物を広く電子媒体を通じて公開するシステム。文部科学省はオープンアクセス化を目指して、リポジトリの設置を各大学に求めている。具体的には、学位論文の審査要旨や紀要などが対象になる。

機関所属者の研究成果である論文等、大学及び研究機関等において生産された電子的な知的生産物を保存し、原則的に無償で発信するためのインターネット上の保存書庫。研究者自らが論文等を掲載していくことによる学術情報流通の変革と同時に大学等における教育研究成果の発信、それぞれの機関や個々の研究者の自己アピール、社会に対する教育研究活動に関する説明責任の保証、知的生産物の長期保存の上で、大きな役割を果たす。(文部科学省用語集より)

教育工学

これまでは「自分が習ったように教える」という教育者にとって楽な教え方に終始してきたが、それでは KKD(勘、経験、度胸)の域を出ない。そこで教育の場で、学修を効果的に行うための教育技法の理論形成、開発、解析・評価、および応用等をおこなう学問領域がつけられた。授業設計 (ID) は、この一分野である。→ID

教授目標分類

Bloom L. は、教育目標を1) 認知領域、2) 情意領域、3) 精神運動領域の3領域に分類した。一般的には教育は認知領域に限定したものと見なされているが、教育学においては態度や技能なども教育の対象として、この分類が使われている。

教授目標分類(動詞)

認知領域

列記する, 列挙する, 述べる, 具体的に述べる, 説明する, 分類する, 比較する, 対比する, 類別する, 関係づける, 解釈する, 予測する, 選択する, 同定する, 弁別する, 推論する, 予測する, 公式化する, 一般化する, 使用する, 応用する, 適用する, 演繹する, 結論する, 批判する, 評価する

情意領域

行う, 尋ねる, 助ける, コミュニケートする, 寄与する, 協調する, 示す, 見せる, 表現する, 始める, 相互に作用する, 系統立てる, 参加する, 反応する, 応える

精神運動領域

感ずる, 始める, 模倣する, 熟練する, 工夫する, 実施する, 行う, 創造する, 挿入する, 操作する, 動かす, 手術する, 触れる, 調べる, 準備する, 測定する

共用試験

臨床実習開始前に医療系大学(医・歯・薬)の学生を対象に行われる評価試験で、コンピューターを用いた知識・問題解決能力を評価する客観試験(CBT: Computer Based Testing)と態度・診察技能を評価する客観的臨床能力試験(OSCE: Objective Structured Clinical Examination)から構成されている。医学部と歯学部との共用試験は、公益社団法人 医療系大学間共用試験実施評価機構(CATO)が試験の実施にあっている。薬学部は、薬学共用試験センター(PhCAT)がおこなっている。これらはもともとは文部科学省の医療系大学教育の質保証の一環としてスタートしたが、全国医学部長病院長会議(AJMC: Association of Japanese Medical College)では、これを資格試験として用いようとしている。なお、獣医では獣医学共用試験(vetCBT と vetOSCE)が平成 28 年から開始予定である。注意:卒業時に受験する医歯薬の国家試験は厚生労働省管轄で、獣医師国家試験は農林水産省管轄であるのに対し、大学コース中におこなわれる共用試験は文部科学省が管轄している。→CATO、PhCAT

情意領域 Affective Domain

教授目標(Bloom L)の一つで、興味・態度・価値観の変容、適応力などの目標を指す。コミュニケーション力やグループ作業における貢献などを評価対象とする。本学校歌の「心を修め」はこれに相当する。→教授目標、教授目標分類(動詞)

精神運動領域 Psychomotor Domain

教授目標(Bloom L)の一つで、運動技能や操作技能に関する目標を指す。技術・手技を評価対象とする。本学校歌の「技を練り」はこれに相当する。→教授目標、教授目標分類(動詞)

成績評価の厳格化

学士課程教育をめぐっては、卒業認定における評価の厳格化も大きな課題となっている。評価の厳格

化は、卒業時だけの問題ではなく、入学してからの教育指導の過程における成績評価についても、学生の成長という観点から考えなければならない。(文部科学省資料より)→DP、アセスメントポリシー

大学ポートレート(仮称)

「大学における教育情報の活用・公表に関する中間まとめ」(平成 23 年8月5日)において、大学の教育情報の活用・公表のための共通的な仕組みとして整備することが提起された。平成 24 年2月、「大学ポートレート(仮称)準備委員会」が発足し、大学団体が連携し、高校や産業界の意見も反映して整備を進めることとしている。大学ポートレート(仮称)の整備により、①大学が教育情報を自らの活動状況を把握・分析し、改革につなげる(いわゆるIR: Institutional Research 機能の向上)、②各大学の多様な教育活動を、国内外に分かりやすく発信、③各大学大学の業務負担軽減(基礎的な情報を共通に公表することで、大学の個別問合せへの対応を軽減)、などの効果が見込まれている。(文部科学省資料より)→IR、認証評価

単位 Credit

我が国の大学教育は単位制度を基本としており、1 単位あたり 45 時間の学修を必要とする内容をもって構成することが標準となっている(大学設置基準;昭和 31 年 10 月 22 日文部省令第二十八号)。講義の場合は授業 15 時間で自学自習が 30 時間、実習の場合は授業が 30 時間で自学自習が 15 時間となっている。従って、1単位になるためには1時間授業を 15 回あるいは2時間授業を8回することになる。日本の殆どの大学では、90 分授業を 120 分と見なしてカリキュラムを組んでいる。昨今、「90 分授業は長すぎる」との批判があるが、もし 60 分授業にした場合は、単位をクリアするために(法令が変わらない限り)授業時間数が 33%増しになることを覚悟しなければならない。なお、法令上からいえば講義室・実習室内の授業時間の 1/2~2 倍の時間を自学自習することが求められているが、医療系学部教育では、だいたいどの学部でも 9 時から 4 時まで 7 時間以上の授業と実習があるので、もし法令遵守するとしたら、睡眠時間を削ってでも、勉学に勤しまなくてはいけないことになり、全く非現実的である。しかし文部科学省は未だに「1単位は 45 時間の学修」の看板を下ろしていない。

地域基盤型教育 community based education

地域をベースにした医学教育・実習の方法。大学病院ベースの教育に比較して、コモンディージーズが集まる市中病院で実習することが主体となり、基本診察手技の経験機会が多く確保されやすい。さらに「地域社会で求められる保険・医療・福祉・介護などの活動を通して、地域医療と地域包括ケアシステムを一体的に構築することの必要性・重要性を学ぶ」ことになる。(診断と治療社:地域医療学入門より一部引用改変)

認証評価

高等教育機関(大学・短大・高専)の教育・研究の質保証と向上を目指して、文部科学省が推進している制度で、大学全体の評価(機関別認証評価)と領域別認証評価の2種類があり、前者は法律で評価を義務づけられている。更に文部科学省は、卒業時の学士力向上を目指して学部ごとの評価をおこなおうとしている。いずれも、自己評価書と実地調査の2つからなる。

- **機関別認証評価**

全大学は学校教育法により、7年に一度、全大学は教育機関として適正かどうか評価されなければならない。評価にあたっては、公益財団法人大学基準協会(JUAA;最も古い機構、おもに有名私立大学が受審)、独立行政法人大学改革支援・学位授与機構(NIAD-Q;旧名 大学評価・学位授与機構、おもに国立大学が受審)、公益財団法人日本高等教育評価機構(JIHEE;私立大学協会が母体で、おもに中小私立大学が受審)、一般財団法人大学教育質保証・評価センター(JAQUE)、あるいは一般財団法人大学・短期大学基準協会(JACA)のいずれかに審査を申込む。岩手医科大学は平成18年度と同25年度そして令和2年度に大学基準協会の評価を受けた。評価基準はどの機構のものも大同小異であるが、大学改革支援・学位授与機構のものが具体的かつ詳細なものとなっている(それだけに、自己評価書の記載自由度が少ない)。審査にあたっては、自己評価書を作成する他に、段ボール箱1つ以上のボリュームになる証拠書類を用意しなければならない、準備には1~2年以上かかる。書類審査の後、実地調査が入り、適合・不適合の評価を受ける。

機関別認証評価が、大学の教育の質の向上をもたらしたかどうかは異論がおおい。形骸化した基準で評価しているに過ぎず単に「評価疲れ」を生んだだけでは無いのか、分野別評価との棲み分けはどうなっているのか不明である、適合の認証を受けた大学が廃校となる事例がある、等の批判がある。機関別認証評価体制そのものの第三者評価は誰がどのような形でなされるのかはっきりしないまま、「評価作業の負担を軽減するため」という名目で、認証機関は令和元年と2年に3機関から5機関に増えた。

- **分野別評価**

学問分野(領域)ごとに、学士力を保証するための国際的認証制度。日本の医療系大学・学部ではなされてこなかったが、他の国では教育力が乏しい大学も多いことから、分野別の認証評価制度が導入されている。なお、異なった形で「認証」が行われるのは行政的にまずいせい、日本語表記では大学の受けるものは機関別「認証」評価というが、分野別からは「認証」の二文字が削られている。しかしながら、分野別評価に携わる機関の英語名には、**Accreditation** という語が入っている。

文部科学省はグローバルスタンダードの名の下に関連機関に分野別評価システムの構築を求めている。既に工学領域では^{ジャビー}JABEE(社)日本技術者教育認定機構が教育機関の認定をおこなっている。医療系学部では、6年制に移行した薬学部で、(社)薬学教育評価機構(JABPE)による分野別認証評価が2008年から始まっている。これは機関別認証評価システムに準じたものになりそうである。医学部では、外国の医師がアメリカで医療行為を行うためには登竜門となる試験(USMLE: United States Medical Licensing Examination)を受けてECFMG(Educational Commission for Foreign Medical Graduates)で認定されなければならないが、USMLEの受験資格として、2023年以降は「医療教育の質が保証された大学を卒業したこと」を条件とした。そ

これを契機に 2013 年 2 月に日本医学教育認証評議会(JACME: Japan Accreditation Council for Medical Education)が設立され、WFME から評価機関としてメタ認証を受けた。これにより、JACME によって適合判定されれば国際的に認証された医育機関として国際基準に達したと見なされることになった。歯学部も薬学部・医学部に追随して分野別評価をすることになる。→ECFMG, JACME, WFME

認知領域 Cognitive Domain

教授目標(Bloom L)の一つで、知識の再生や知的技能の発達についての目標を指す。知識や知恵、その応用力を評価対象とする。本学校歌の「知の一切を糧として」はこれに相当する。→教授目標、教授目標分類(動詞)

能動学修 Active learning

教育は、「教師が何を教えたか」ではなく、「学修者が何を修得したか」に重きをおかねばならない、ということから推奨されている学修方法。

学修者は教師から一方的に教わるのではなく、自らおこなうことで認知領域のみならず情意領域や精神運動領域の成長が加速される。医療系大学で講義以上に実習が重視されるのは、そうした理由からである。更に講義においてもグループ学修や演習など、学修者が能動的に学修をすすめるテクニックが求められている。PBL(Problem based learning)やTBL(Team based learning)はそうした技法の一つである。学修者がお互いに意見を述べるとともに傾するという場面を作ることで、協調性も培われるとされる(Learning through discussion)。なお、グループ学修では、グループ構成員の役割を固定化せずに順繰りに分担を代えていくのが良い(Round Robin)。

→LTD、RR、PBL、TBL

発達障がい Developmental disorder

行動やコミュニケーション、社会適応の問題を主とする障がいで、人間関係を上手く築けない。自閉症スペクトラムやアスペルガー症候群、注意欠陥・多動性障がいなどいろんなものを含めているが、定義はあいまいである。学修がうまくできない学生の中には、こうした障がいを持っている場合がある。以前は、学修障がいの人は大学に入学できなかったが、大学全入時代に入ったことで、こうした学生は増えてきている。発達障がいの人の中には天才的な人物も含まれており、学生支援を適切におこなうことが求められている。尤も、社会性を欠き一つのことにと没頭しがちな大学教員も発達障がい者的なところはある。

ちなみに、もともとは障「碍」という字が用いられていたが、大正時代以降は障「害」が一般的になった。しかし周りに「害」を及ぼすわけではないので、現在は「がい」とひらがなで表記することが多くなっている。

分野別認証評価

→認証評価

反転授業 flip teaching, flipped classroom

コンピュータやインターネット利用が一般的になってから考案された授業形態で、優れた教育効果をもたらすということでマスコミ等で取り上げられている。学修者はまず用意された教材(講義)をビデオ配信等で受講する。教室での授業では、学修者が予習で得た知識を応用して問題を解き、実習し、教員は問題を解くのに手間取っている学修者を個別に指導する。教員側にとってみると、(小学校などでは既存の教材メディアを利用することは可能であるが)事前に授業ビデオと演習問題を用意しておかなければならないし、シラバス通りの授業進行が求められる。診療活動で忙しい医学部教員にとっては、ハードルが高い。もともとは学修意欲の乏しい生徒・学生に対する能動学修として効果があるとされていたが、予習の習慣が殆ど無い(あるいは予習する時間が取れない)学生にとっては、TBL 同様に教育効果は望めないかもしれない(それどころか、コースから離脱する可能性がある)。また、学修者は自学自習する場所がインターネット利用環境であることが前提条件となっている。ちなみに、反転授業は実空間授業を活かすための手段であり、授業の全てを仮想空間でおこなうという ^ム ^ー ^ク MOOCとは異なる。→MOOC, TBL

【高等教育行政の施策誘導に使われる用語】

- 以下の用語は、2010年代以降、文部科学省の補助金支給や機関別認証評価等で施策誘導する際に使われるようになった用語で、その多くがビジネスコンサルタント業界で用いられていたものである。産業界からは、効率性と実効性を大学教育と運営を求める声があがっており、中教審による答申でも、ビジネス界で使われるカタカナやアルファベット用語がしばしば見られる。
- 但し、これらの用語による活動が必ずしももとのビジネス界において実効性と効率性の向上をもたらしたかどうかの検証が充分でないことに注意しなければならない。また、思想的あるいは哲学的な側面を欠いたもので、高等教育あるいは研究機関にふさわしいものとは言いがたいものも含まれている。中には、「やっている感」をアピールするために、常日頃、誰もがやっていることをことさらに横文字や略語にしているようなものもある。

KPI; Key Performance Indicators 重要経営指標、重要業績指標、戦略指標

最終的な目標に対して、その達成につながる状況をみる定量的な（測定可能な）数値指標のこと。最終目標を表す指標は KGI（Key Goal Indicators 重要目標達成指標）と言うはずだが、政府から出されている日本再興戦略では、KPI が「達成すべき成果目標」としている。文部科学省から国立大学法人に求めている数値指標は、「戦略指標（KPI）」である。既に私立の学校法人も中期計画をたてるように義務づけられており、私立大学でも遠からず KPI の設定を求められることになるかもしれない。KPI はその性格上、PDCA サイクルとデータ解析部門の IR とセットになっている。→PDCA サイクル、IR

PDCA サイクル ; Plan, Do, Check, Act

機械で造った製品の不良率を下げるために考え出された品質管理の手法で、オリジナルは日本。後に、経営戦略をたてる企業マネジメントにも使われるようになり、更には行政指導にも PDCA が適用されるに至っており、現在は教育の質向上には不可欠のシステムとして、この整備が文部科学省あ認証機関から求められている。

《PDCA に対する批判》

文部科学省の施策誘導では自明のごとく教学マネジメントにおいて PDCA サイクルを回すことが求められている。質の向上に必須と思われがちであるが、批判も多い。大学において育成する人材を、工場から出荷される製品と同じに考えて良いか、という本質論もさることながら、チェック作業の形骸化と、予めプランを決めることによる目標の矮小化により、大学の持つ自由闊達な精神活動が痩せ細る、という指摘がある。また、東日本大震災やコロナ禍に代表されるような突発的な危機に際しては即時的に柔軟性を持った対処をしなければならず、PDCA サイクルでは対処できない。それにも拘わらず、機関別認証評価では PDCA サイクルの中に運営の全てを落とし込もうとする傾向がある。それが過剰になり、全ての業務をサイクルの中に落とし込んで年度毎に機関決定の手順を踏むとなると、対処できるのは早くても 2 年後、資金の裏付けを持った法人の中期計画（5 年計画）に入れ込むとしたら更に数年かかることになる。手順からの逸脱を嫌う日本人が PDCA サイクルにこだわるに即応性を欠く組織をつくりかねない危険性があることに留意するべきであろう。また、共産圏では

過ちを認めながらない官僚組織が中期計画の達成にあたって成果を「作文」したために計画経済が破綻しており、このことは教条主義的に PDCA サイクルを適用することの危険性を示している。

《教学マネジメントにおける PDCA の意義》

「PDCA サイクルを回すことが教育の質の向上につながる」との前提でおこなわれている機関別認証評価や各種補助金申請にあたっては、PDCA サイクルを回すことが目的化した組織づくりがおこなわれている。しかしながらこうした組織改変をいやいやおこなう（＝やったふりでごまかす）のではなく、教育の質の向上には何が必要かを考えて実行する過程で、「成功と失敗の振り返り」をする手段として PDCA サイクルを意識するのが良い。

（補足）PDSA サイクル；デミングは、晩年にサイクルの C を Study に入れ替えた PDSA を提唱した。これは計画に沿って作業がなされたかどうかを評価する（チェックする）のではなく、うまくいかなかった理由あるいは想定外の事がおきたかどうかを研究して（Study）対処をする（Act）というモデルである。

スオット SWOT分析

いろんな課題を整理する方法の一つ。ビジネスコンサルティング業界由来の用語で、文部科学省が施策誘導に使っている言葉の一つ。

	達成するとき役立つもの	達成を妨害するもの
内的要因	特徴(Strength) 他者より優れているところ	弱点(Weakness) 他者より劣っているところ
外的要因	機会(Opportunity) 組織(会社・大学)にとって有利なこと	脅威(Threat) 組織(会社・大学)にとって不利なこと

外部環境や内部環境を、強み (Strengths)、弱み (Weaknesses)、機会 (Opportunities)、脅威 (Threats) の 4 つのカテゴリーで要因分析して、現在の資源を有効活用する方法で、1920 年代にハーバードビジネススクールのビジネスポリシーコースの一部として開発されてきた。最近では大学の方針決定においても、SWOT 分析を導入するところが増えている。PBL の導入時に KJ 法と組み合わせても良からう。また、各部署の総括や大学全体の機関別認証評価などの自己点検評価書を作成する際には SWOT を意識すると良いと思われる。→KJ 法

アカウントビリティ 説明責任

もともとは経営用語で、経営者が株主や投資家あるいは従業員に対して、企業の経営状態や財務内容を報告する義務のことを指す。会計責任とも言う。説明を受ける側をステークホルダーと称する。大学運営におけるアカウントビリティは、原義に沿えば大学財務を文部科学省に報告することであるが、現在は教学全般における大学の運営全般に関する情報をホームページ等へ公開することまで含まれている。→ステークホルダー

ガバナンス 内部統制

組織を構成するメンバーが主体的に関与を行なう、意思決定、合意形成のシステムのこと。組織運営にあたっては権限と責任の所在を一致させることと、ボトムアップとトップダウンのバランスをとること、及びコンプライアンスがガバナンスとして重要な要点となっている。

日本の大学運営にあたっては、教授会は審議機関であるにも拘わらず事実上の議決機関として意思決定をおこなっており、権限と責任の所在が一致していないというガバナンス上の不備があった。そこで平成 27 年から改正された学校教育法では、「学長のリーダーシップのもとに戦略的に大学運営できる体制」をつくることを目指しているが、ともすればトップダウンを押しつける学長と、ボトムアップの自主性・独立性を言い立てる教授会の対立的な図式に置き換えられかねない状況に陥っている。これは学校教育法の主旨説明が教職員に充分になされなかったことによるものであろう。→コンプライアンス

コンプライアンス 法令遵守

かつて高等教育機関は、社会通念上は聖人君子からなる組織とされていたが、ハラスメントや研究費不正流用など、様々な運営上の不明朗な事象が起きたことから、企業が社会に対して倫理的に正しい運営がなされていることを示すコンプライアンスという概念を、大学運営にも適用するようになった。広義のコンプライアンスでは、法律違反をしない、というだけではなく、倫理や社会規範に従うことも含めている。組織を構成する個々の人間の倫理的行動の総和が、組織としてのコンプライアンスとなる。

ステークホルダー 利害関係者、受益者

経営者から経営状態や財務内容を報告される者。本学におけるステークホルダーは岩手医科大学運営方針に「大学活動の主たる受益者を、入学希望者、学生、卒業生、卒業生を受け入れる医療機関や研究機関、行政機関、研究成果を還元する研究者と市民、医療を受ける地域住民といたします。」と定めている。それぞれに適切な情報を伝達することで、アカウンタビリティを果たすことになる。→アカウンタビリティ

選択と集中、傾斜配分

企業・組織においては、限られた資金と資源を集中的に運用する経営戦略をたてるのが一般的である。文部科学省は同じ事を高等教育機関に求めており、学内における業績評価と傾斜配分を推進している。但し、選択と集中また成果に応じた傾斜配分は、本来は教育機関内でなされるものであるにも拘わらず、文部科学省はアカデミズム全体に適用してしまったことから、研究資金は即時的効果が望まれる分野に競争的に配分されることになり、基礎科学界は飢餓状態に陥っている。

ブランディング

企業・組織のマーケティング戦略の 1 つで、自組織の強みを強化してブランドとして顧客へ認知させること。文部科学省は各私立大学のブランド化を推し進めるための最長 5 ヶ年計画の補助金制度「私立大学研究ブランディング事業」を平成 28 年度から開始した。しかしながら 5 年でブランドが

作られるわけもなく、しかも不祥事からそれを廃止するに至り、採択大学は年次研究計画を見直さざるを得なくなった。

ベンチマーキング

企業や組織等が事業を継続的に測定し、優れた他組織のパフォーマンスと比較・分析する活動のこと。定量化された尺度で比較することになる。教学運営に関して言えば、大学ランキング等に用いられる数字を用いることになる。

見える化、可視化

企業や組織の運営状況・活動実態を具体化的かつ客観的に捉えられるようにすること。最近では、大学の教学運営に関しても用いられ、一種の流行言葉となっている。また、学生の教育成果の進捗状況・達成度を図式化したレーダーチャートのことを指す場合にもしばしば使われる。

ロジックツリー

経営コンサルタント等で、問題・対象を大まかに分類し、関連した条項ごとに階層的にツリー状に細分化する方法。対象物を細分化していく点で教育ツールとしてよく使われる Mind-Map と一見似ているが、Mind-Map は階層化を意識しない自由な発想を活かすのが目的であるのに対し、ロジックツリーは階層構造がしっかりしていて項目に重複は無い。→Mind map

【Out of Date】 かつては常識的に使われていた用語

GP Good Practice

2000年代に日本の文科省が進めた「優れた大学教育の取組」に対する支援制度。正式な教育用語ではなく行政用語に過ぎないが、文科省の政策誘導に乗って補助金を獲得する際には知らなくてはならない用語の一つであった。

【ドイツ語由来の業界用語】 各大学・医療機関ごとに方言有り (補遺参照)

ドイツ医学の名残か、今でも中途半端に業界用語としてドイツ語が残っている。地方の病院のベテラン看護師さんも新人苛めの材料としてよく使うことがある(らしい)。

オーベン oben "上の"から転じた業界用語 指導医、上級医(上席医)

ドイツで上級医を oberer Arzt ということから、日本の医療系大学では上を意味する oben を、指導してくれる先輩医師を意味する言葉としてしばしば使っている。かと言って、指導されている若手の医師を「下」を意味する unten (ウンテン)と言うかというとなんかそんなことはなく、新人医師のことは Neuherr(ノイヘレ;新しい+紳士)と呼び習わされてきた。あるいは、初心者こそベン、ややベテランをチューベンと称することもある。→メンター、プリセプター

《用例》「私のオーベンは〇〇先生で、めっちゃ、きつい！」

クルズス der Kursus "コース、講習会"から転じた業界用語 臨床実習中のミニ講義

もともとは講習会や講義を表す言葉であったが、転じて臨床実習中のミニ講義をクルズスと称するようになった。全国の医科大学でおしなべて見られる傾向が、「ポリクリで評判の良い科目は、クルズスの多いところ」である。国試対策には良いかもしれないが、BSL (bed side learning) を標榜していながら系統的なミニ講義をしているのだとしたら、これは ^{ようとうくにく}羊頭狗肉 であろう。「真面目に臨床実習をすると認知領域(知識と書面上の問題解決能力)主体の国試の合格率が下がる」というのは、日本の医学教育の裏の常識となっている。

《用例》「今日のポリクリは、クルズスばかりで眠かった！」

ザール der Saal "広間"から転じた業界用語 手術室

手術室を der Operationssaal ということから、日本の医学界では略してザールと称していた。岩手医科大学のような古い大学では慣習として用いられているが、他大学では死語となっている。

《用例》「ポリクリ A 班は、13:00 にザールに集合！」

チーテル der Titel "称号"から転じた業界用語 博士号

かつては、医師は学位を取ること、立身出世が望めたため、大学医局に属することが多かった。学位の仕事はチーテル・アルバイトと呼ばれていた。専門医志向が強くなった今日、学位を取るとはさほど重要視されなくなったが、そのため大学の研究力は低下している。

《用例》「チーテルなんて、足についた米粒か派の間に挟まったカスのようなもの。取ってもたいしたことないし、でも取らないと気持ち悪い。」「うちのオーベン、チーテル・アルバイトの面倒を全然見てくれない。」

ビーコン wiederkommen "再び来る"から転じた業界用語 再試験

再試験は、教員が学生に対して、「もう一度試験を受けに来い」と命令することから、日本の医療系大学で広く使われていた言葉。三度目や四度目の試験をトリコンやテトラコンと称することもあるが、ラテン語とドイツ語をあわせて作られた俗語である。

《用例》「ビーコン覚悟で捨て科目をつくるのは、アホだ、って先生が言っているよ。」

ポリクリ die Poliklinik “総合診療病院”から転じた業界用語 臨床実習

語源 ギリシャ語の πόλις /póli-s/ '都市' と κλίνη /klíne/ '病床'に由来する。転じて都市部の総合病院を意味する言葉となった。戦前の日本の医学教育はドイツ系で、臨床実習も外来診察が主だったため、この Poliklinik を縮めてポリクリと称した。第二次大戦後に病棟実習が重視されたアメリカ医学が導入されて久しいが、未だに使われ続けている。従来の見学型臨床実習の意味でポリクリを使う人もいる（対比して使われる診療参加型実習をクリニカル・クラークシップと言う）。また、ポリクリという言葉は古くさいので、BSL (bed side learning) へ読み替えようと提唱している人もいるが、現在の臨床実習の実態は、外来・病棟に加え訪問看護なども包括しており、BSL の字義通りの定義を逸脱している。おおまかに言って医学部における臨床実習をポリクリあるいは BSL と言っても差し支えないであろう。注意: 多くの (poly) 診療科 (clinical)、という意味ではない。→BSL、クリニカル・クラークシップ

《用例》「今日のポリクリは、オペの見学なのでザール集合です！」

マーゲンチューブ Magen tube ドイツ語と英語からなる和製業界用語 胃管

胃をドイツ語では Magen と言う。それに英語の tube がつけられた。英語では gastric tube、ドイツ語では ^{マーゲンゾンデ} Magensonde という。

《用例》「昨夜は眠ったと思ったら、看護師からマーゲンチューブ入れてくれって言われてさあ」

ムンテラ Mundtherapie (言葉による治療) ドイツの業界用語を縮小した日本の医学業界用語

患者あるいは家族に病気の経過を説明、あるいは死期が迫っている旨を伝えること。基本的にパターンリズム (父権主義) に基づく説明であり、共感を呼び起こすようなスキルも何も無い、一方的な説明をする医師も多かった。「自分の病気について知るのは患者の権利である」という観点からおこなわれる患者・家族へ説明を「インフォームド・コンセント informed consent」として、ムンテラと区別する人もいる。

《用例》(急変した患者の上申を受けて)「家族へのムンテラはどうなっている？」

ムント ^{ムントリッヒェ プリューフング} die mündliche Prüfung “口頭試問”を縮小した業界用語 口頭試問

Mund はドイツ語の「口」のこと。もともとの意味もわからず、「ムントは嫌だ」と言う学生もいるが、恋人と交わす甘い口づけ Küß は嫌いとも思われない。

《用例》「解剖実習のムントは S 先生なら楽だが H 先生はビーコン覚悟で」

メルクマール das Merkmal 特徴、指標

事象を見分けるための目印、あるいは転じて評価の観点や基準を示す場合にも使われる場合がある。

《用例》急性期病院のメルクマールとして「診療密度」を用いて良いか、異論が多い。

ライヘ die Leiche “死体” から転じた業界用語 解剖体

解剖実習用の死体を、ライヘと称していた。物体として取り扱うような印象を受ける事から、使われない傾向があるが、教授クラスは未だにライヘという言葉を使用する人も多い。また、解剖実習で解剖体を

つつむビニールパックは、「ライヘパック」と呼ばれている。ちなみに、「献体」という用語は、もともとは死んだ後の自己の体を自分の意志で医学の教育や研究のために医療系大学に寄附する行為のことであり、解剖体そのものを指す言葉ではなかった(最近では、解剖体と同義に用いている人も多くなっているが、誤用である)。また、岩手医大の教育現場では、解剖体を「ご遺体」と言うようにしている。

《用例》(年かさの医師からしばしば医学生へ向かって)「ところで君たちはライヘ 1 体当たり、何人で解剖しているの？ライヘは足りているの？」

ドイツ語に由来する医学業界用語

一部フランス語も有り

ジャンル	耳にする言葉	原語	意味 (→ 転じて業界用語)
人体各部	コップ	der Kopf	頭
人体各部	(ゲ)ヒレン	das Hirn	脳
人体各部	リュッケンマルク	das Rückenmark	背中の(Rücken)+髄(Mark)→脊髄
人体各部	パウケンヘーレ	die Paukenhoehle	鼓(Pauken)+室(Hoehle)
人体各部	ゲジヒト	das Gesicht	顔
人体各部	ツアーン	der Zahn	歯
人体各部	ツンゲ	die Zunge	舌
人体各部	マンマ	die Mamma	乳房
人体各部	ブルスト	die Brust	胸
人体各部	ルンゲ	die Lunge	肺
人体各部	ヘルツ	das Herz	心臓
人体各部	バウフ	der Bauch	腹
人体各部	マーゲン	der Magen	胃
人体各部	ダルム	der Darm	腸
人体各部	ディックダルム	der Dickdarm	大腸
人体各部	デュンダルム	der Dunndarm	小腸
人体各部	ニーレ	die Niere	腎臓
人体各部	ミルツ	die Milz	脾臓
人体各部	ベッケン	das Becken	骨盤
人体各部	ハルンブラーゼ	die Harnblase	膀胱
人体各部	クノッヘン	der Knochen	骨
人体各部	デルマ	die Dermatologie	皮膚科
人体各部	ハウト	die Haut	皮膚
人体各部	ツエレ	die Zelle	細胞
人体各部	ゲベーベ	das Gewebe	組織
症状	シュメルツ	der Schmerz	痛み Bauchsmerz 腹痛
症状	デファンス	(フランス) defense	筋性防御
手技・治療	ムンテラ	die Mundtherapie	口頭による病状説明 今で言うところの、インフォームドコンセント
手技・治療	ミッテル	das Mittel	材料→薬
手技・治療	ナート	die Naht	縫合

手技・治療	カイザー	der Kaiserschnitt	帝王 (Kaiser)+切開 (Schnitt)
手技・治療	マルク	das Mark	髄質→骨髄 (穿刺)
手技・治療	プンク (チオン)	die Punktion (フランス) en	穿刺
手技・治療	デブリ (ドマン)	Debridement	壊死組織を取り去る手技のこと
手技・治療 (歯)	ヘーベル	der Hebel	挺子 英語のエレベーターもよく使われる
病気	クレブス	der Krebs	ガン; Mammakrebs 乳ガン、 Magenkrebs 胃ガン
病気	ナルベ	die Narbe	瘢痕、傷跡
病気	デメンツ	der Demenz	認知症 (痴呆)
病気	アイテル	der Eiter	膿
病気	デクビタス	das Dekubitus	褥創
検体	ハルン	der Harn	尿
検体	コート	der Kot	糞
検体	ブルート	das Blut	血液
検体	ローテ	rote Zellen	赤い細胞→赤血球
検体	ワイセ	weisse Zellen	白い細胞→白血球
病院	アナムネ	die Anamnese	病歴 病歴聴取を「アナムネを取る」という
病院	カルテ	die Karte	カード→診療録
病院	クランケ	die (oder der) Kranke	病気→患者
病院	ザール	der Saal	大広間→手術室 (OperationsSaal) schauen (見る) + Kasten (箱) →ショーケース→放射線画像を読映するためのバックライト付きの装置 画像がデジタル処理されるようになってから 急速にすたれつつある
病院	シャウカステン	der Schaukasten	
病院	ティッシュ	der Tisch	テーブル→手術台 (Operationstisch)
医療	アウフネーメン	aufnehmen	受け入れる→入院
医療	エントラッセン	entlassen	追出す→退院
医局	オーベン	oben	上の→上級医、指導医
医局	チーテル	der Titel	タイトル→学位

医局	チーテルアルバイト	die Titelarbeit	学位取得に向けた研究
医局	ハウプト	der Haupt	頭→主術者、論文責任著者
医局	ネーベン	neben	副の→補助術者、論文協力著者
医局	ベシュライバー	der Beschreiber	書き手→診療録などを書く補助者
医局	ラボ(ランチン)	die Laborantin	もともとは女性の実験捕手のこと 転じて 医局の秘書さんを指す
死	ライヘ	die Leiche	死体
死	ステルベン	sterben	死ぬこと (ステル ということあり) =Tod
死	ゼクチオン	die Sektion	切開く→病理解剖
死	ティッシェントード	der Tischentod	手術台上の死、術中死
学修	クルズス	der Kursus	コース、講習会→臨床実習中のミニ講義
学修	ムント	die mündliche Prüfung	口頭試問
学修	ビーコン	die Wiederkommenn	もう一度来る→再試験
学修	ポリクリ	die Poliklinik	都市の総合診療病院→臨床実習 注意: 多くの(poly)診療科(clinical)、という意味ではない
その他	ドゥンケル	dunkel	暗い
その他	クラール	klar	明るい